ちいさな証

その御旨が分かる日を

トムセン・ハンス
スイス日本語福音キリスト教会会員

私は京都生まれです。子供の頃の思い出は殆ど日本しかありません。幼稚園は京都でしたが、静岡県袋井市近くの小さい村の小学校に通いました。その村のまた山奥の所で父が建てたデンマーク牧場に住んでいました。

両親はデンマークから来た宣教師で、日本で教会を建てたり、クリスチャンのネットワークを設けたり、他の外国人宣教師とさほど変わらない役割をしていました。しかし派遣して下さった教会の希望で他の仕事もありました。一つはキリスト教と他の宗教の間の関係を深めることでした。ですから家にはよくお坊さんやカリスマ的な宗教家が訪ねて来た覚えがあります。そこで父が書いた新興宗教の本はその結果の一つです。

もう一つの仕事はデンマーク牧場を建て、デンマークの農業のノウハウを日本で広めることでした。そこで、祖父がデンマークの赤牛をオイルタンカー船上に作った木造の小屋に入れ、神戸港まで連れて来ました。そして、祖父とデンマーク農業学校からの先生達は静岡の山奥で、母国の牧畜を東北や北海道などから来た生徒達に教えていたことも憶えています。

一才の時、京都修学院の家にて。抱かれているのは筆者、両親と兄のエリック

このようにして私は、日本と西洋の関係を熱心に研究し、教えたり説教したりしていた家庭で育ちました。父は自分で組織を作ったにもかかわらず、他の組織が嫌いな人でした。ですから、国際学校に子供を送ることは、せっかく日本に居る意味がなくなる、つまり派遣された国の人と一つになるということを大切にしました。それで私と兄は、その辺のごく普通の学校へ通いました。父は日本語だけで十分だと判断し、私達兄弟はデンマーク語や英語は全く習いませんでした。

今から考えるととても幸せな時でした。小さな殿様みたいにちやほやされて、ひどく甘やかされていたと思います。しかし、小学校３年生の時、突然デンマーク行きが決まり、この夢のような時から目を覚まされ、新しい文化に放り込まれました。デンマークの学校では、私はもう殿様ではなくなりました。私にとっては厳しい現地の学校へ通うことになりました。そこで幼い私は、いつか必ず日本へ戻って、また日本との関係を自ら立て直すと、心に強く決めました。しかし、どうやって日本へ帰れるのかは、分かりませんでした。

１０歳の時。デンマークに来たばかりの頃。

将来の道が分からない私には、どう進路をとったらよいのか、それも分かりませんでした。宣教師の息子のくせに、キリスト教が基本的にはどういうことであるのか、イエス様と歩んでいく道とはどういうことなのか、そう言うことは分かっていると思いながら、結局は何も分かっていませんでした。宣教師の家庭に育っていても家族の会話で宗教が話題には決してならない不思議な家庭でした。説教や聖書研究をしていた父は、自分の子供を導くより神様に任せておく、という考えだったのでしょうか。行くなら行って、迷うなら迷って、兎に角、宗教は自分で探る道でした。

そこで、ティーンエージャーの頃より色々探し求めましたが、どの教会、どの宗派に参加しても、問題、いわゆる距離感を深く感じました。結局、教会に頼るより自分の力に頼って神への道を探そうという傲慢な思いが心の中に生まれてきました。デンマークの大学では生化学を研究し、とても真面目な先生に恵まれました。実験室で沢山の時間を過ごし、その後、先生に信頼されて鍵を貰ったので、大学で一晩中実験したこともよくありました。これこそ自分の道だと決め、化学実験を通して神様の「生」が必ずいつか分かるのだと自分中心に考えていました。